

私立大学研究ブランディング事業

2016年度の進捗状況

学校法人番号	131036	学校法人名	成城学園		
大学名	成城大学				
事業名	持続可能な相互包摂型社会の実現に向けた世界的グローバル研究拠点の確立と推進				
申請タイプ	タイプB	支援期間	5年	収容定員	4860人
参画組織	グローバル研究センター、民俗学研究所、経済研究所				
事業概要	<p>本事業は、成城大学が世界に先駆けて開始したグローバル研究の蓄積を基に、多様・多元・多層的な存在や価値観が併存する相互包摂型社会のあり方を提示するとともに、それを支える人と社会の「しなやかさ」(resilience)の解明を目指すものである。その成果を、本学の伝統とする高度教養教育に還元することで、来たるべき未来社会で活躍する「しなやか人材」の育成をも担う世界的なグローバル研究・教育拠点の確立と推進をめざす。</p>				
①事業目的	<p>本事業は、グローバル化（グローバル化）がますます進行・浸透する未来社会において、6つの分野（「生活資源」、「文化資源」、「身体資源」、「人的資源」、「環境資源」、「金融資源」）を対象とするグローバル研究を通して、多様・多元・多層的な存在や価値観の併存を互いに許容する相互包摂型社会をより望ましい社会として構想し、提示する。同時に、そうした社会で柔軟に生きかつ活躍する新しい人間像を「しなやか人間」（「しなやか人材」）として提起する。最終的には、本事業の研究成果を教育実践へと活用する経路を明確化することで、研究と教育の両面から「グローバル研究」を世界的レベルで推進し、「しなやか人材」の育成を本学のブランディングとして確立することを目指す。</p>				
②2016年度の実施目標及び実施計画	<p><実施目標> 事業期間と定める5年間で、迅速かつ効果的にプロジェクトを実施するため、研究拠点であるグローバル研究センターの研究環境並びに体制を整備、拡充する（特に、日本内外への情報発信のためのホームページを重点的に整備する）。年度の冒頭にキックオフ・シンポジウムを開き、グローバル研究の理論と方法を再確認するとともにその修正すべき点を検討する。その上で、本事業を分担実施する6つの研究チームそれぞれが理論的・実証的研究の開始に臨む。また、研究ネットワークの海外拡大に備え、海外の大学・研究機関との連携、協力関係の構築を試みる。またアジア太平洋無形文化遺産研究センターと連携し、グローバル研究の理論と方法を実践的に適用する試みとして、ユネスコの無形文化遺産に関するプレ国際シンポジウムを開催する。</p> <p><実施計画></p> <ol style="list-style-type: none"> 1 研究拠点としてのグローバル研究センターの研究環境と研究体制の整備、拡充 2 グローバル研究の理論と方法の再確認 3 事業を構成する6つの研究チームと総括チームによる理論的、実証的研究の開始・推進 4 日本内外の大学ないし研究機関との連携、協力関係の拡大 5 ユネスコ無形文化遺産に関するプレ国際シンポジウムの開催 				
③2016年度の事業成果	<ol style="list-style-type: none"> 1 研究拠点としてのグローバル研究センターの研究環境と研究体制の整備、拡充 事業の円滑な遂行のために、①研究センターの整備、②事務体制の整備、③情報発信のための環境整備としてのホームページの開設、などをおこなった。 2 グローバル研究の理論と方法の再確認 グローバル研究は現在構築を進めている新たな研究分野であり、今後研究活動を進める中で、理論化を進めることを考えている。本年度は参加メンバーが共通の認識をもつことを目的に全体ワークショップを開催した。 3 事業を構成する6つの研究チームと総括チームによる理論的、実証的研究の開始・推進 本事業の具体的な研究は①生活資源チーム②文化資源チーム③身体資源チーム④人的資源チーム⑤環境資源チーム⑤金融資源チームにより実施される。本年度は各チームともそれぞれ設定した目的・計画に基づき研究を実施した。 総括チームはグローバル研究の方向性を定めるとともに、各チームの研究を概括し、調整を行うことを目的としている。本年度は全体ワークショップを実施し、事業の中核となるグローバル研究についての基本的な共通認識の醸成をおこなった。さらに全体事業として、6回の国際シンポジウム・ワークショップ、1回の国内ワークショップをおこなった。 				

<p>③2016年度の事業成果</p>	<p>4 日本内外の大学ないし研究機関との連携、協力関係の拡大 各研究機関との連携・協力関係については、以下の大学と現在検討を進めている。シンガポール・ナンヤン工科大学（シンガポール）、グアダハラ大学（メキシコ）、ルートヴィヒ・マクシミリアン大学（ドイツ）、ソウル市立大学（韓国）</p> <p>5 ユネスコ無形文化遺産に関するプレ国際シンポジウムの開催 2017年6月に開催を予定している <i>International Symposium on Glocal Perspectives on Intangible Cultural Heritage : Local Communities, Researchers, States and UNESCO</i>（無形文化遺産をグローバルに見る——地域社会と研究者、国家、ユネスコの相互作用）のプレシンポジウムとして、2017年3月6日に同名の公開国際シンポジウム、<i>Glocal Perspectives on Intangible Cultural Heritage Local Communities, Researchers, States and UNESCO</i>（「無形文化遺産をグローバルに見る——地域社会と研究者、国家、ユネスコの相互作用」）を開催した。</p>
<p>④2016年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>（自己点検・評価）</p> <p>① 研究拠点としてのグローバル研究センターの研究環境と研究体制の整備、拡充 研究環境と研究体制の整備は順調に行われていると考えられる。</p> <p>② グローカル研究の理論と方法の再確認 全体ワークショップの開催等で、グローバル研究についての共通の認識の醸成を図っていることは評価できる。</p> <p>③ 事業を構成する6つの研究チーム並びに総括チームによる理論的、実証的研究の開始・推進 研究チームはワークショップを開催したり個別研究を実施するなど精力的に活動しており、評価できる。総括チームもグローバル研究についての共通認識の形成を目指した活動をおこなっている点は評価できる。しかしながら、研究全体の方向性に関しての検討はやや不十分であり、この点については改善の必要がある。</p> <p>④ 日本内外の大学ないし研究機関との連携、協力関係の拡大 内外の大学との連携、協力関係の拡大については、事業初年度ということもあり、まだ導入的な段階に留まっている。また、連携・協力関係を構築するにあたっての方針やガイドラインがいまだ確定されておらず、早急に整備する必要がある。</p> <p>⑤ ユネスコ無形文化遺産に関するプレ国際シンポジウムの開催 プレシンポジウムは開催されており、計画どおりに実行されている。</p> <p>（2）全体的な評価 ブランディング事業の実行に当たっての制度・事務体制はすでに整備されており、事業遂行のための基礎的な環境は整備されている。また、各研究チームの研究も順調な立ち上がりを見せている。さらに、ユネスコ賛助機関であるアジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）との共催による無形文化遺産に関する国際プレシンポジウムも開催されるなど、個別の研究や研究のブランディング化は順調に進められている。</p> <p>その反面、各研究チームの活動を俯瞰し、統一した研究ブランディング化の方向性を出すことについては、やや不十分と言わざるを得ない。グローバル研究の将来的な展望や内外の大学・研究機関との連携などについては、全体的なマネジメントが不明確であり、これらの点については早急な改善が求められる。</p> <p>（外部評価） 外部評価委員として須藤健一（堺市博物館館長）、山本真鳥（法政大学教授）、岩本渉（アジア太平洋無形文化遺産研究センター所長）の三氏に委嘱をおこなった。</p>
<p>⑤2016年度の補助金の使用状況</p>	<p>研究拠点としてのグローバル研究センターの研究環境と研究体制の整備、拡充を行った。研究支援のためのPDとRAを雇用し、成果発信のためのホームページ改修、機器備品、書籍を購入した。各研究チームは個別研究を行い、ワークショップを開催し、成果報告を刊行するなど精力的に活動しており、補助金は主にシンポジウム開催費用、調査出張旅費、研究成果の印刷、郵送等に使用した。</p> <p>研究費</p> <p>[旅費交通費]学会・調査出張旅費 [図書資料費]書籍代 [消耗品費]ビデオカメラ、デジタルカメラ等 [用品費] パソコン等 [印刷製本費]研究成果印刷 [保守料]コピー機 [賃借料]シンポジウム機材 広報・普及費 [委託報酬費]ホームページ改修、講演料等 [雑費]招聘者航空券・宿泊費等</p>